遊びの指導

飯沼佳子

「かぶとは木の蜜をすうんだよ」
「あ！この木にはかぶときっといるぞ」
「だって、あの穴に入っていないよ」
「かぶと虫は、木の高い所にいるんだよ」
「じゃ、この木ゆすろうよ」

林の中からわきあがる歓声を聞くにつけ、両手に、かぶと虫をつかんで意気ようようと保育室へひきあげて来る子どもを見るにつけ、幼児で遊びがどんなに大切かを感じます。

しかし、実際には、十分に子どもを遊ばせたいと思いながらも、やれ、運動会だ、クリスマスだと、子どもが自由に遊ぶ時間を、教師の意志で動かすことの多い毎日です。

これではいけないと思いつつも、また、次々に起こるできごとに対処する、教師としての私は、はたして、あのようにふるまってよかったのだろうか、と迷い、反省させられることばかりです。

ここでは、幼稚園での日常の遊びとその指導を、私の園の特徴を中心とした具体例によってみていきたいと思います。

私の園は、いわゆる、自然に恵まれています。園の庭は広々として、林につながり、林もある程度奥行きがあります。

また、園は、田畑はもちろん、果実園、林、草原に囲まれています。

自然物は豊かですが、遊具が少なく、もっと欲しいと思います。

当然、自然物を対象として遊ぶ機会が多くなります。四季、折

折に変化する自然は、幼児に飽きることない遊びの場を提供してくれます。

そこで、私はこれから、自然物を対象としてどんな遊びが展開し、それがどんなふうに発展していくかを述べていきたいと思います。これは、昨年秋、五歳児を受け持った時のことです。

登園すると同時に、四、五人の男児が、決まって昆虫図鑑を持って林に入って行く日が幾日も続いていました。

つかまえた虫を、林の中であろうが、庭であろうが、図鑑をひろげ、その四、五人で首をつきあわせ、調べているのです。

図鑑で調べるようになったゆえんは、はじめの頃、つかまえて来た虫の名前をひっきりなしに、教師に聞いたものでしたが、薄学な教師には、聞かれても名前の言えない虫が多かったものですから、「じゃこの本で調べましょう」と昆虫の絵本を持ち出したり、簡単な図鑑で調べたりして、子どもと一しょに名前を確かめていました。その内、子どもたちは、前記の図鑑などで調べたのでは、わからない昆虫に出くわし、小学生用の図鑑から、ついには、専門書の部類の図鑑へと必要とする本が変わって行きました。

最後に、子どもたちが一番信頼し、使用頻度も多かったものは、専門的な図鑑でした。

昆虫の名前を知るために、字を読むのは、必要条件になりました。教師や、すでに字を知っている幼児をつかまえ、よみ方を聞き歩く子どもも出て来ました。

小学生用の図鑑を見ていて要求が出て来たことと思われますが、そのうち、昆虫の飼育が始まりました。

図鑑に絵入りで示された、飼い方をたよりに、ビンの中へ砂を入れたり、紙をびんの途中へ入れたり、ガーゼをはったりしていました。

教師は、子どもたちが要求する道具を捜したり、作るのを手伝うのにおおわらわでした。

子どもが、次から次へと自分の遊びを発展させ、夢中になっています。

こうなったら、もう安心です。

こういった状態になるまで、幼児を導いて来るにはやはり、教師の積極的な意図が入園当初からの幼児になされなければなりません。

対象を自然に限った場合、幼児に自然への興味を向かせるような指導を入園期から振り返って考えてみます。

今、このように振り返って考えてみますに、その時々に幼児とともに、過ごして来た、毎日の生活、その積み重ねが、いつとも

知らず、子どもたちに、自然への興味をひらかせていったもので、こうすれば、きっと、こうなる、などと自信をもって行なって来たものではありません。

どのように誘導すれば、よいのか、ああもし、こうもしてみた迷いの過程です。

しかし、一番有利なことは、豊かな自然が身のまわりに、手軽にあることです。教師は子どもが行きづまった時、本とか、道具とか、知識とかいった方法で、それを発展させていけばよかったのです。

入園一カ月位は、持ち物の仕末、お手洗、おどおどしている子どもに笑顔を向けたりで、林まで足が延びません。

昼飯が始まり、時間的にも余裕が出て来ますと、さて子どもたちを林へ案内する時です。

すでに、林へ入ったり、草むらで、遊ぶのに夢中の子どももおりますが、大半は園庭に続く林に何があるのか知りません。

五月の始めとはいえ、まだ、新芽は出ず、林は昨年の冬そのままの落葉がつもり、木々を透して林の奥まで見透せ、恐くなさそうですが、子どもははじめ入るのをいやがります。

林の入口で昨年の残りのどんぐりやまつかさを拾ったり、木にぶらさがったりしている内、すこしずつ、奥に入って行く子どもも出て来ます。

ある時には「林に探検に行こう」といってクラス全体をひきつれて出かけます。

林に入ると何かに必ずぶつかります。どんぐりが落ちていたとか、きのこがあったとか、新芽がふくらみ出したとか。

林を一周するだけでも、子どもは大変よろこびます。自分で何かを見つけ出した時の興奮はまた、大変です。

しかし、女児などでは園につくとほっとして「ああよかった」などと、ため息をついて、もう林に入りたがらない者もおります。

だんだん、林になれて来たものの、余り興味のないものがおおぜいおります。

これは、今年のことですが、何か子どもが夢中になるようなものが林やそれに続く草原にあるといいのだがと考えていた頃、ちょうど、「先生におみやげ持って来たよ」と毎朝、タンポポを持って来てくれる子どもがおりました。

その花を、それとなく、他の子どもにわかるように、ある時は胸につけ、また、花びんにさしておきました。

「タンポポね」とか「きれいだ」とか「タンポポとりたい」などいろいろな反応を示し出しました。

それでタンポポを採りに皆で、草原に出かけました。一面にタンポポや、すみれの咲く草原に思わず歓声があがり、夢中で、タンポポ摘みがはじまります。

こんな経験を何回か重ねる内に、いくつかの花の名前を覚え、わからないものは、観察の絵本で子どもとともに調べたりもしました。

こんなふうにして、だんだん、自然に親しみ出しますが、それも日によっていろいろです。

ある時は、保育室がからっぽで、どこに散ったのか確かめるのに大変な時もありますし、室内におおぜいがひきこもっている日もあります。

まんべんなく、多くの遊びをさせたいと教師は望みますし、特に天気のよい日などは、戸外の広い所で、大気を十分にすわせ、体じゅうではねまわらせたいという気が先立ちます。

「ねえ、外で遊ばない」などといっても子どもの返事は冷たいものです。

このごろでは、こんな方法をとることもあります。

室内で遊ぶ子どものそばで、「川のふちに、まだかまきりの赤ちゃんいるかしら」

「たくさんどんぐり落ちてたから拾ってこようかな」

「花の種もっと集めてこようかしら」などと独言をいいながら外に出ます。

室内にいる子どもの何人かは先生の行動を気にかけています。教師につられて出て来る子どもも幾人かおります。何をするというでもなくぼんやりしている子どもには、積極的なさそいかけをしても、成功します。

しかし、ウルトラマンごっことか怪じゅうごっこ、幼稚園ごっこなどしている時には、なかなか教師の独言など聞えません。

それは、それでいいと見ていますが、余り室内で細かい遊びばかりしている子どもには、体全体を動かして遊んでもらいたいと考えます。

こんなことがありました。

幾日も室内の一角にイスを集めて幼稚園ごっこをしている数人の女児がいました。

教師は、もうそろそろ戸外で遊ばせたいと考えていました。子どもの方の遊びも、同じことの繰り返し、発展が見られませんでしたので、ごっこ遊びの子ども先生に声をかけました。

「先生、今日は遠足に行ったら」

これは効を得て、それからしばらくは、昼食が済むと遠足だと言って列になって林へ出かけていました。

子どもの遊びの指導を、自然物での遊びについて見て来ましたが、他に「ごっこ遊び」とか集団のゲーム的な遊びを通じて、子どもが「これはおもしろいぞ」と感じ、また、それに、夢中になったら、もうしめたものです。

それまでは、どうしても、ある程度、積極的に教師が引っぱって行くことが必要です。

数多くの経験をさせ、その中で、子どもが「おもしろいぞ」と感じるこれも数多い遊びを見つけ出させることが大切です。

教師が積極的に子どもを引っぱっていく中にも、子ども自身が新たな発見をして、それを通して「おもしろいな」と感じる何かを経験するのを待ってやることも必要です。

このかねあいが難かしいものです。

子どもは、はじめバッタも、コオロギもなかなか捜せません。最初は、こちらが見つけて、手にとって見せてあげるのですが、どうにかして、それらを自分で発見するようにもって行きたいと思い、教師は、自身が見つけた、バッタやコオロギに目をやりながらも、口をついて出ようとすることばをおさえ、子どもたちが自分でそれを見つけるのを待ちます。

自分で見つけ出すことは、子どもにとって大変うれしいことです。「あ！、かまきりがいた」「大きなきのこだナー」という喜びや、おどろきは、自分でそれを発見した時、より一そう、大きいようです。

またみつけてやろうという意欲もわきますし、どういう所にいるのだということも自分で学びます。

これが、幼児の真の活動ではないでしょうか。

将来へつながる「生きる道」ではないでしょうか。

遊具と言うにはあまりにも偉大で壮厳な、この自然は、つきることのない遊びを提供してくれますが、ともすると、野放図で、粗野な人間を作り上げる恐れもあります。

それは、自然に対する対処法とでもいう問題においてです。

やってはいけないことは、具体的に、一つ一つはっきりとさせておくことが必要です。

また、事あるごとに、繰り返すことも必要です。

採集した草花や昆虫は最後までめんどうを見る。それができない時は、草花は摘まない。昆虫類は逃がす。

木の枝を折らないとか、木の実類は一切口に入れない。幼児が日常行ける林の範囲などは、予めはっきりさせておきますし、時時思い返させています。

遊びと保育計画との関係について、ちょっと述べてみます。

クラス全体が部屋に集まった折など、その時期の自然物、草花

とか、昆虫とかの観察の写真集、絵本をよく見せます。

本を見ながら「同じものを見た」とか「どこにあった」とか話し合い、今度、一しょに探そうと約束したりします。

めずらしいものなどは、採って来て皆に見せたり、ある子どもが採ったものなどは、その子の名前をあげ、皆に見せたり、かざっておいたりもします。が、これではあまり興味をさそわないようですし、本物に触れさせることになりません。

しかし、本を見たり、標本を見たりで、きのこならきのこへの親しみが増せばと思ってやっています。

一方、自分たちが実際に見つけたり、採ったりしたものを絵本の中で見るのは印象を深めるのに大変役立つようです。

他に、自然物の利用なども保育計画にとり入れたいとも考えますが、自然物をあまり、小手先でいじりまわすのもどうかと思い、あまりやっていません。これは、どんな遊びをとおしても、子どもがそれに真剣に打ちこみ、次々と遊びが展開していくうちに、子ども自身がぶつかる問題ですが、遊びをとおして、物の真偽を見きわめる力が出て来ると思います。

前に述べた昆虫の本などもその例かと思います。

また、子どもは、虫を集めるだけなら、いつかいやになります。教師は一しょに虫をとりながら「このとんぼ、羽は何枚あるかしら」などと数えてみます。「じゃ足？」ということになり、遊びが一歩進みます。小学生などが何年生ではこれだけは学ばなければいけないという態度で同じようなことをやるかも知れませんが、ここでは「学ぶ」のではなく、遊びの発展する方向として教師は「羽は何枚あるかしら」と問題を提起するわけです。

あそびを深めていく過程自体が大切なわけです。

これまで述べて来た問題からそれますが、幼稚園では「遊べない子どもをどうするか」に教師は必ずぶつかります。

現在の、そして今までの子ども自身を知ることが一つです。一方、幼稚園側として遊具の数、量、クラスの人数を子どもが自分で選択する余裕を持って整える必要があります。

第三に、教師が前二点をふまえた、また、それらをうまく活用しての誘導の問題があります。

以上、遊びについていろいろな側面から見て来ましたが、ともすると保育者は自分をおし出しがちでいけないと反省します。

遊びで子どもは何を得るのでしょうか。その子なりに、夢中で遊び、楽しかった、おもしろかったなどの経験の積み重なりが将来の生活の基になるのではないでしょうか。

一人一人の子どもが、その子なりに十分に遊べる生活の場を私ども教師は整え導きたいものです。

（松本青い鳥幼稚園）